

特集 自己免疫性内分泌疾患の病態

自己免疫性下垂体炎の病態*

Key words: Autoimmune hypophysitis, Lymphocytic adenohypophysitis, Lymphocytic infundibuloneurohypophysitis, Antipituitary antibodies, Hypopituitarism

橋本浩三**
七宮和歌子**
高尾俊弘**

概念

自己免疫性下垂体炎は、下垂体にリンパ球や形質細胞が浸潤する慢性的炎症性疾患であり、リンパ球性下垂体炎と同一の概念として扱われている。原因には自己免疫機序が関与すると考えられ、炎症がときに視床下部に及ぶことがあることより、自己免疫性視床下部下垂体炎と称されることもある。

1962年GoudieとPinkertonにより最初に報告され¹⁾、当初きわめて稀な疾患と考えられていたが、MRIなどの画像検査の進歩に伴い、近年報告例が急遽に増加している。当初は炎症が前葉のみに認められるリンパ球性下垂体前葉炎(lymphocytic adenohypophysitis)が主として報告されていた。

1970年Saitoら²⁾は、視床下部-下垂体後葉系に局限したリンパ球性炎症が原因で発症した尿崩症の剖検例を報告した。Kojimaら³⁾も同様の症例を報告し、リンパ球性漏斗下垂体神経炎(lymphocytic infundibuloneurohypophysitis)として報告した。1993年Imuraら⁴⁾が下垂体茎や下垂体後葉に炎症が局限するリンパ球性漏斗下垂体神経炎が、多くの特発性尿崩症の原因となっていることを提唱して以来、この疾患の報告が最近とくに増加している。また、リンパ球性炎症が下垂体前葉と下垂体茎や下垂体後葉の両方に波及

する症例の報告も増加し、リンパ球性汎下垂体炎(lymphocytic panhypophysitis)という概念も提唱されている⁵⁾。

尿崩症患者で下垂体前葉腫大と下垂体茎の肥厚が認められる例の中で、壊死性漏斗下垂体炎(necrotizing infundibulohypophysitis)という概念も報告されている⁶⁾。これらの例では下垂体前葉障害を伴い、病理学的には、下垂体前葉や下垂体茎、後葉にリンパ球、形質細胞、マクロファージの浸潤や壊死が認められることが特徴とされており、後述の尿崩症を合併したリンパ球性下垂体前葉炎やリンパ球性漏斗下垂体神経炎との病態との相違が問題とされている。

リンパ球性下垂体前葉炎

1. 報告例と臨床症状

1962年の最初の報告より、現在までに少なくとも150例以上のリンパ球性下垂体前葉炎が誌上で報告されている。われわれが以前146例の報告例で検討したところ、女性例が87%、男性例が13%と女性に多く、女性例の54%は妊娠第三期または分娩後1年以内に発症した例であった⁷⁾。厚生省間脳下垂体機能障害調査研究班の平成10年度全国疫学調査結果によると、自己免疫性視床下部下垂体炎(リンパ球性漏斗下垂体神経炎を含む)の本邦報告例は、52例であり、女性32例

* Clinicopathology of autoimmune hypophysitis.

** Kozo HASHIMOTO, M.D., Wakako NANAMIYA, M.D. & Toshihiro TAKAO, M.D.: 高知医科大学第二内科(〒783-8505 高知県南国市岡豊町小運); Second Department of Internal Medicine, Kochi Medical School, Nankoku 783-8505, JAPAN

1999 Hashimoto, K Naibunpi Tonyobyo ka
(Endocrinol Diabetol) 9: 534-540

